

# 江戸後期の信州における医療関係資料（一）

安藤 裕

横 関 徳 二

（整形外科上田花園病院長 医学博士）

まえがき

江戸時代後期の科学の発達の中で、理・工・農の分野の発達もさることながら、この時代の医療技術の進歩は目ざましく、とくに重要なものと言える。

古く中国から日本に伝来し、広くわが国に根ざした漢方医療に対し、この頃、新たにオランダから齎らされた西洋医療、即ち蘭方との競合は凄まじいものであったらしい。長野県下にこの頃の医療に関する資料が、かなり残っているのではないかと思っていたところ、小県郡真田町誌編纂室の柳沢孝雄氏より文政五年（一八一二）と嘉永五年（一八五二）の二点の町内資料があるとのこと教示を得た。また、資料の読みに就いても同氏にご協力いただいたので、厚くお礼申し上げる。

以下それらの内容に就いて述べるが、前者は外傷の診断書、後者

は上田藩庁から領民へ「牛痘接種」に就いての啓蒙を狙った触書らしい。

この報告は、資料の原文を図に示し、それを活字に直したもの(一)、さらに現代風書き換えたもの(二)に、簡単な解説と説明を加えたものである。

医療関係に就いては主に横関が、牛痘伝来に関しては主に安藤が分担した。

## 資料 一

（文政五年）矢嶋幸戴による「容鉢書」

現真田町内の旧横沢村の平吉、八重の両人が火繩銃の疵で苦しんでいるのを診てほしいとの頼みがあり、矢嶋が真田村の俗医八郎右衛門を伴って往診した際の診断書である。解剖、病状、症状、治療薬品などの医用語は、オランダ語を漢字で表した蘭方ものらしく、

意味不明のものが殆どである。それらに就いては後日の検討に俟ちたい。

(一) 容 鉢 書

洗馬組

横沢村

平 吉

同村葛右衛門 女

屋 い

右之者共今般鉄炮疵二而難洪之由頼来候二付 則真田村俗医八郎右衛門同道シ而罷越容鉢得と診察仕候処左ニ申上候

一 平吉儀疵所相改候處喉疵後領江打徹シ 疵口黒色にして烙毒上下左右江廻り喉中祢都登迄ニ及び漫々として由宇登比由流之如く

難證ニ 殆相成 尚且後領須比伊留を打剪候故右腕垂下り動作不遂疼痛頗劇敷難堪鉢に御座候 喉疵之四邊も焰火ニ焼爛連其色暗黒或ハ赤腐ニ炎之如く尤毒内攻口舌破傷涎沫を流し鄭声不云

脉惣沈微惣緊數ニして無定度 天庭創肉破見骨 依之額疵二者中ニ邊利不須を入外二者美伊仁伊を上膏ニ仕 炮疵二者疵之内江

波志里古無を入其上二者押膏を仕四邊焼爛之所二者可舞府羅安登を貼し内菓二者鮮齏正氣湯を相用候得共 深く蠻法を校ひ候処

矢炮比一伊留を切或者烙毒内攻気管及動脈ニ纏注し暗然として如瓦 或者堅硬腫之者ハ難洪之症也と殊ニ病人老年と申右鉢之容態

鉢二而ハ存命相叶申間敷と奉存候

一 葛右衛門女八重儀者鉄炮ニ而右之龍骨從後徹前骨碎古女伊

容鉢書

洗馬組

横沢村

平 吉

同村葛右衛門 女

屋 い

右之者共今般鉄炮疵二而難洪之由頼来候二付 則真田村俗医八郎右衛門同道シ而罷越容鉢得と診察仕候処左ニ申上候

一 平吉儀疵所相改候處喉疵後領江打徹シ 疵口黒色にして烙毒上下左右江廻り喉中祢都登迄ニ及び漫々として由宇登比由流之如く

難證ニ 殆相成 尚且後領須比伊留を打剪候故右腕垂下り動作不遂疼痛頗劇敷難堪鉢に御座候 喉疵之四邊も焰火ニ焼爛連其色暗黒或ハ赤腐ニ炎之如く尤毒内攻口舌破傷涎沫を流し鄭声不云

脉惣沈微惣緊數ニして無定度 天庭創肉破見骨 依之額疵二者中ニ邊利不須を入外二者美伊仁伊を上膏ニ仕 炮疵二者疵之内江

波志里古無を入其上二者押膏を仕四邊焼爛之所二者可舞府羅安登を貼し内菓二者鮮齏正氣湯を相用候得共 深く蠻法を校ひ候処

矢炮比一伊留を切或者烙毒内攻気管及動脈ニ纏注し暗然として如瓦 或者堅硬腫之者ハ難洪之症也と殊ニ病人老年と申右鉢之容態

鉢二而ハ存命相叶申間敷と奉存候

図一 文政五年 矢嶋幸戴の容鉢書 (美濃紙継紙)

一 平吉儀疵所相改候處喉疵後領江打徹シ 疵口黒色にして烙毒上下左右江廻り喉中祢都登迄ニ及び漫々として由宇登比由流之如く 難證ニ 殆相成 尚且後領須比伊留を打剪候故右腕垂下り動作不遂疼痛頗劇敷難堪鉢に御座候 喉疵之四邊も焰火ニ焼爛連其色暗黒或ハ赤腐ニ炎之如く尤毒内攻口舌破傷涎沫を流し鄭声不云 脉惣沈微惣緊數ニして無定度 天庭創肉破見骨 依之額疵二者中ニ邊利不須を入外二者美伊仁伊を上膏ニ仕 炮疵二者疵之内江波志里古無を入其上二者押膏を仕四邊焼爛之所二者可舞府羅安登を貼し内菓二者鮮齏正氣湯を相用候得共 深く蠻法を校ひ候処 矢炮比一伊留を切或者烙毒内攻気管及動脈ニ纏注し暗然として如瓦 或者堅硬腫之者ハ難洪之症也と殊ニ病人老年と申右鉢之容態 鉢二而ハ存命相叶申間敷と奉存候

志幾<sup>シキ</sup>と申症ニ相成候 時刻経<sup>シ</sup>久候故筋緩右腕<sup>ウデ</sup>伸<sup>ノビ</sup>下<sup>シ</sup>り候 併勢<sup>ヘイセイ</sup>伊仁<sup>イニ</sup>宇<sup>ウ</sup>又<sup>マタ</sup>比<sup>ヒ</sup>一<sup>イチ</sup>伊留<sup>イリュ</sup>等<sup>ト</sup>之大筋者無事ニ御座候故経脈<sup>キョウマク</sup>ハ通<sup>ト</sup>し五指共ニ屈伸<sup>クツシ</sup>ハ仕候 櫛<sup>シ</sup>又頭頂之疵<sup>シ</sup>ハ長三寸許 是ハ打創<sup>ウチクサ</sup>故創口<sup>クサグチ</sup>両方江開去<sup>カキ</sup>左之方殊ニ深創<sup>フカクサ</sup>ニて骨缺<sup>ツツカ</sup>陥<sup>ツ</sup>毛髮<sup>ウモ</sup>創内江倒<sup>ツ</sup>乱仕 額創<sup>カシラクサ</sup>も天中より少右へ寄<sup>ツ</sup>縦創<sup>タテクサ</sup>にて長一寸許 尤浅創<sup>ウツクサ</sup>脈都洪<sup>ツ</sup>大心氣鬱<sup>ウツ</sup>冒<sup>ウ</sup>して睡臥<sup>スイガ</sup>を好申候 依之頭創<sup>ウツクサ</sup>者か寿<sup>ス</sup>がひ寄候并ニ波留<sup>ハルサム</sup>佐無<sup>サ</sup>及<sup>ツ</sup>ブ<sup>ツ</sup>ラントウエイ等ニ而額創<sup>カシラクサ</sup>共<sup>ト</sup>に卷木綿<sup>マクワタ</sup>仕候 腕疵<sup>ウデシ</sup>ハ悉<sup>ツ</sup>く疵内<sup>シ</sup>を能洗<sup>ツ</sup>ひ可舞<sup>カ</sup>舞<sup>マ</sup>府羅安登<sup>フヲラアト</sup>を徹<sup>ト</sup>木綿<sup>マクワタ</sup>ニ敷<sup>ツ</sup>両方江通<sup>ト</sup>し疵口<sup>シ</sup>ニ者邊<sup>ヘリ</sup>利<sup>リ</sup>不<sup>ツ</sup>須<sup>ス</sup>を貼<sup>ツ</sup>し柳<sup>ヤナギ</sup>簾<sup>シタ</sup>を阿<sup>ア</sup>て疔<sup>ウチ</sup>与<sup>ツ</sup>卷置<sup>マク</sup>申候 内薬<sup>ウチヤク</sup>ハ排毒湯<sup>バイドクツ</sup>を為<sup>ツ</sup>用候<sup>ツ</sup>処療<sup>ツ</sup>後正氣<sup>テイキ</sup>も付<sup>ツ</sup>申候而少々者宣<sup>ツ</sup>様子<sup>ヨウシ</sup>ニ相見<sup>ツ</sup>申候 乍去<sup>ツ</sup>是<sup>ツ</sup>逆<sup>ツ</sup>も輕重<sup>ケイジュウ</sup>之異<sup>ツ</sup>而已<sup>ツ</sup>硝毒<sup>シヤウドク</sup>ニ而<sup>ツ</sup>肘<sup>ツ</sup>前<sup>ツ</sup>より肩井<sup>カシラ</sup>辺迄<sup>ツ</sup>も腫居<sup>ツ</sup>り暗滯<sup>アンシ</sup>凝肉<sup>ネイニク</sup>之様子<sup>ヨウシ</sup>ニ御座候得者<sup>ツ</sup>変症<sup>ヘンシヤウ</sup>之程<sup>ツ</sup>者無<sup>ツ</sup>覚束<sup>ツ</sup>奉<sup>ツ</sup>存<sup>ツ</sup>候 御尋<sup>ツ</sup>ニ付<sup>ツ</sup>此段<sup>ツ</sup>申<sup>ツ</sup>上<sup>ツ</sup>候 以上

文政五年午二月十六日

松代横町住 曲尾村止宿

矢嶋 幸載 印

小林 将吉殿

溝口 右平太殿

(二)

右の者達が、今般、鉄砲疵で苦しんでいると頼んで来ましたので、真田村の俗医 八郎右エ門を同道して訪ね、容態を得と診察してみましたので、左にそれを申し上げます。

一 平吉の疵を改めて診察しましたところ、喉疵は後領へ撃ち抜け、疵口は黒くなり、鉄砲の焰毒が疵の上下、左右へ廻り、喉

の中の祢都登<sup>ネツト</sup>にまで及び蔓延<sup>マンエン</sup>し、由宇<sup>ユウ</sup>登比<sup>トヒ</sup>由<sup>ユ</sup>丸<sup>マル</sup>に殆どなっており、その上、後領<sup>コウリョウ</sup>須比<sup>スヒ</sup>一<sup>イチ</sup>伊留<sup>イリュ</sup>を撃ち切っているので、右腕は垂れ下がったままで、動かすことは出来ません。痛みはしきりで、甚だしく、堪え難いように御座いました。喉の疵の周囲も焰火で焼けただれてうす黒く、あるいは赤くただれて炎の如くで、硝毒<sup>シヤウドク</sup>が内に入って、口や舌を傷め、涎を流し、小さい声でもものを言うことが出来ず、脈は弱くなったり、急になったりで、一定ではありません。額の創は肉が破れて骨が見えています。この様なので、額疵<sup>カシラシ</sup>は中に刃利<sup>ヘリリ</sup>不<sup>ツ</sup>須<sup>ス</sup>を入れ、外側には美伊仁伊<sup>ミイニイ</sup>で膏藥<sup>カウヤク</sup>しました。鉄砲疵<sup>テッポウシ</sup>には疵の中へ波志理<sup>ハシリ</sup>古無<sup>コム</sup>を入れ、その上に打膏<sup>ウチカウ</sup>しました。周囲の焼けただれた所には可舞<sup>カ</sup>舞<sup>マ</sup>府羅安登<sup>フヲラアト</sup>をつけ、内薬<sup>ウチヤク</sup>には鮮鬱<sup>センウツ</sup>正氣湯<sup>テイキツ</sup>を用いました。私は、深く蘭法<sup>ランポフ</sup>を考えてみましたが、鉄砲<sup>テッポウ</sup>が比<sup>ヒ</sup>一<sup>イチ</sup>伊留<sup>イリュ</sup>を切っており、焰毒<sup>エンドク</sup>が内に入り気管<sup>キカン</sup>および動脈<sup>ドウマク</sup>にまで及び、黒くなって瓦のような堅硬腫なので、予後<sup>ヨコゴト</sup>が悪いことを存じております。殊にこの病人は老人でもあり、右のような容態なので、存命<sup>ソンメイ</sup>は不可能<sup>ボウネイ</sup>と考えられま

す。

一 葛右衛門の娘八重は、鉄砲疵が右の龍骨の後より前に通っており、骨は砕けて古女伊志留<sup>コメイシリュ</sup>という症状になっています。疵を受けてから随分時間がたっているので、筋肉がゆるみ、右腕が伸び下がっています。しかし、勢伊仁宇<sup>セイイニウ</sup>また比<sup>ヒ</sup>一<sup>イチ</sup>伊留<sup>イリュ</sup>などの大きい筋肉は無事なので経脈<sup>キョウマク</sup>は通り、五指の屈伸は出来ます。なおまた、頭頂の疵は、長さ三寸ほどの打ち創で、創口は左右に開き、左の方は殊に深い創で、頭骨が陥没して、毛髪が創の中

にまで入り込んでいます。額の創も天中から少し右へ寄った縦創で、長さは一寸ほどあります。創は浅いのですが脈が弱く、大そう気持ちが鬱冒していて、眠りたがるとの事でした。創口を頭のかすがいに引き寄せ、波留佐無及びブランドウエイン等で治療し、額創ともに巻木綿をしました。腕の疵は内側を悉くよく洗い、可舞府羅安登を徹木綿につけ、両方へ通し、疵口には刃利不須を貼り、柳簾をしつかり巻いておきました。内薬には排毒湯を与えたところ、正気が出てきて、少しばかり良い様子に見えました。こうではありますが、これとても症状が重くなるか、軽くなるかは、すでに硝毒によって肘前より肩の辺までも腫れ、どす黒く、凝肉の様子なので、急変するかどうか分かりません。

お尋ねについて、以上の如く申し上げます

〔注および説明〕

原文では医用語にはルビが右側に、注が左側に書かれている。

- 注(カッコ内は筆者等が加えた)
- (一) 首のうしろ(首の後の部分)
- (二) マクワタの事なり(皮下網状組織のこと)
- (三) はびこる
- (四) 疽に似たる難症を云う(疽は激痛をともなう)
- (五) ヨツホト
- (六) まだそのうえ
- (七) 大筋のことなり(腕を拳上する筋肉のこと)

- (八) うすくろく
- (九) よだれ
- (十) ひたい(額)
- (十一) 薬方の名(膏薬か)
- (十二) 膏薬の名
- (十三) つけ
- (十四) 大筋のこと
- (十五) まといそそぐ
- (十六) カタシ
- (十七) ウデより後をとおし前に
- (十八) 骨の碎けたる難症を云
- (十九) かがみのび
- (二十) かけくぼみ
- (二十一) つけ
- (二十二) ひじ
- (二十三) 説明(蘭法で用いた医用語のため不明のものが多い)
- (1) 波志利古無 薬名
- (2) 可舞府羅安登 膏薬名
- (3) 鮮鬱正気湯 内用薬で抗鬱精神薬
- (4) 堅硬腫 症状の名稱
- (5) 龍骨 骨の名稱だが不明
- (6) 古女伊志幾 症状の名稱
- (7) 比一伊留 筋肉名
- (8) 波留佐無 薬名(樹脂と油の混合物)

- (9) ブラントウェイ 薬名
- (10) 巻木綿 包帯
- (11) 徹木綿 ガーゼ（ドレーンとして使った）
- (12) 柳簾 柳で作った副木か
- (13) 排毒湯 内用薬（華岡清洲の創案と言う）

## 資料 一

（嘉永五年）上田藩庁の触書「牛痘摘話」

有史以来、人類を苦しめ続けて来た天然痘（*ホッヅツ*）が、地球上から根絶したとの宣言を世界保健機構が発表したのは、昭和五十五年五月（一九八〇）のことである。

この天然痘征服の長い闘いの歴史については、よく知られている。英国人エドワード・ジェンナーが、画期的な種痘法に関する論文「牛痘の原因及び作用に就いての研究」を発表したのは、寛文八年即ち、一七九六年のことである。この大発見のお陰で、毎年数万、十数万に及ぶ幼児の命が失われていた欧州各国では、いち早くジェンナーの種痘法を取り入れ、天然痘予防に極めて大きな成果をあげている。然し、わが国にこの方法が移入されたのは、嘉永二年（一八四九）のことで、五十余年もの歳月がたつてからであった。

この牛痘法の日本への移入に関しては、中野操博士の研究（昭十三）<sup>(1)</sup>が、また、江戸お玉ヶ池の種痘所に関しては、山崎佐氏の研究（昭一九）<sup>(2)</sup>があるので、詳細に就いてはこれらを参照されたい。ここでは参考のため中野の「牛痘日本移入史年表」を掲げておく。

この真田町内の資料（本原 清水潤氏文書）は嘉永五年春、上田藩主から出された牛痘法に就いての触書で、一般領民に対する啓蒙の為のものと考えられる。最後の部分に牛痘接種の希望者を募っているのに対し、村方総代の三名は村内に希望者なしと報告しているのが興味深い。この新しい方法が、牛の痘瘡を人の体に植えることへの精神的な抵抗と不安があったからであろう。

## 「牛痘日本移入史年表」（多少字句を改めた）

寛政八年（一七九六）

○じえんなー牛痘法ヲ発見

同 十年（一七九八）

○じえんなー A inquiry into the causes and effects of the

variolae-vaccinae etc. ヲ発表

享和三年（一八〇三）

○馬場貞由長崎ニ於テ蘭館長へんどりつく・どうふヨリ牛痘種法

ノ新説ヲ聞ク

文化二年（一八〇五）

○清の嘉慶十年四月、牛痘中国澳門ニ伝来、六月同地ノ英人嘶咄

唌、同国人哆唌吹ノ牛痘書ヲ漢譯「種痘奇法」ト題シテ板行

同 九年（一八一二）

○エトロフ島番人小頭中川五郎治文化四年來擒ハレテ西比利亞各

地ヲ漂浪シ、是歳牛痘種法ヲ習得、露語版牛痘書二冊ヲ携エテ

国尻島ニ送還サレル

同 十年(一八一三)

○春 馬場貞由藩命ニヨリ松前に渡リ、露將ごろうにんニ就キ露語ヲ修ム 此時村上某ヨリ中川五郎治ノ西比利亞ニ於テ得露タル語牛痘書ヲ示サレ、直ニ苦苦シテ和譯シ篋底ニ秘ス  
文政元年(一八一八)

○夏 相州浦賀ニ英船來航、馬場貞由藩命ニヨリ出張ス 船長こそん英文牛痘書ト牛痘痂ヲ贈ルモ貞由辭シテ受ケズ  
同 三年(一八二〇)

○馬場貞由七年前和譯セシ露語版牛痘書ヲ「遁花秘訣」ト題シテ出版、之ガ我邦牛痘書ノ始メ  
同 七年(一八二四)

○蝦夷痘瘡大流行ニアタリ、中川五郎治始テ蝦夷ノ人々ニ種痘ヲ施ス 之レ我邦牛痘接種ノ嚆矢ナリ  
同 初年

○蘭医始テ牛痘苗ヲ長崎ニ齎シ一女ニ接種セシモ、浮説百出シテ即チ已ム

天保二年(一八三五)

○清ノ道光十一年、邸浩川「引痘略」ヲ著ス  
同 六年(一八三五)

○中川五郎治松前福山地方ニテ第二回種痘ヲ施ス  
同 十年(一八三九)

○夏 蘭医りしゆるる牛痘苗ヲ齎シ、長崎ノ二兒ニ接種セシモ驗ナシ

同 十二年(一八四一)

○伊藤圭介嘶咄ノ「種痘奇法」ヲ校刻シ、「新訂種痘奇法」ト改題、始テ我邦ニ紹介

同 十三年(一八四二)

○中川五郎治松前地方ニ於テ三度種痘ヲ施ス

○此頃林洞海及大石良英ハ長崎町年寄高島秋帆ヲ介シテ和蘭ヨリ牛痘苗ヲ取寄セ、兒女十二人ニ接種セシモ悉ク善感セズ  
○高島秋帆痘苗ノ一部ヲ江戸ノ大槻俊齋ニ贈リ、俊齋之ヲ以テ一兒ニ接種

弘化三年(一八四六)

○五月 笠原白翁幕府ノカラ以テ、清ヨリ牛痘苗ヲ輸入センコトヲ越前藩主松平春嶽ニ建言

同 四年(一八四七)

○八月 伊東玄朴佐賀藩主鍋島閑叟ヲ説キ、長崎在住醫官檜林宗建ヲシテ甲必丹れふるそんニ牛痘苗取寄方ヲ督促

○小山蓬洲、邸浩用ノ「引痘略」ヲ「引痘新法全書」ト改題シテ上梓

嘉永元年(一八四八)

○六月 蘭医もーにつけ牛痘苗ヲ齎ス 二兒ニ接種シテ驗ナシ 宗建勸告シテ牛痘漿ニ代エ、牛痘痂ヲ輸入センコトヲ以テス

○九月 蝦夷種痘ノ功勞者中川五郎治歿ス 享年八十一歳 一説安政三年歿スト言フ

同 二年(一八四九)

○七月 蘭船牛痘痂ヲ舶載ス 十七日もーにつけ三兒ニ接種シ一兒善感ス 此ノ苗漸次日本中ニ擴レリ

○八月六日 鍋島侯宗建ヲ招致シ、公子並ニ家中ノ兒女ニ種痘セシム

○九月廿一日 三宅栗齋安藝ニ於テ種痘ヲ始ム

○九月廿二日 支那通詞頼川春池京師ノ日野鼎哉ニ牛痘苗ヲ送り、鼎哉即日孫兒ヲニ種痘ス

○十月十六日 鼎哉及笠原白翁ヲ京都新町ニ除痘館ヲ開ク

○十一月七日 緒方洪庵大阪古手町ニ除痘館ヲ設ケ、鼎哉ヨリ分与ノ痘苗ヲ以テ種痘ヲ開始ス

○十一月十一日 鍋島藩ヨリ江戸ノ伊東玄朴ニ痘苗ヲ送附ス 玄朴仍テ藩邸ノ群兒ニ接痘ス

○十一月十八日 桑田立齋 玄朴ヨリ痘苗分与ヲ受ケ、大ニ種痘ヲ普及ス

○十一月廿五日 笠原白翁福井ニ帰り、城下ニ除痘館ヲ開ク

○檀林宗建「牛痘小考」ヲ著ス

○廣瀬元恭「新訂牛痘奇法」ヲ板行

○小山蓬洲「引痘新法全書附録」ヲ著ス

○松浦元瑠ふーへらんどノ種痘篇ヲ和譯シ、「牛痘種術書」ト題シテ上梓

同 三年（一八五〇）

○利光仙庵馬場貞由ノ「遁花秘訣」ヲ校訂「魯西亞牛痘全書」ト改題シテ出版

○桑田立齋「牛痘發蒙」ヲ著ス

○難波抱節「散花新書」板行

○三宅春齡「有喜全書」ヲ著ス

同 五年（一八五二）

○十月六日 我邦種痘法ノ功勞者檀林宗建歿ス 享年五十一歳

○西村文雄「牛痘解蔽」ヲ著ス

同 六年（一八五三）

○三宅春齡「補憾録」を著ス

○宇都宮徳「集説牛痘新書」ヲ著ス

安政二年（一八五五）

○池内蓬輔「散花養生論」ヲ著ス

同 四年（一八五七）

○五月 伊東玄朴、大槻俊齋、戸塚静海、林洞海、竹内玄同ヲ江戸ノ蘭方医八十余名神田お玉ヶ池ニ種痘館ヲ開設ス

○五月 桑田立齋幕命ヲ帯ビテ蝦夷ニ出張、松前藩下ニ種痘ヲ普及ス

及ス

○同 五年（一八五八）

○四月 大阪除痘館ニ於ケル種痘を官許ス

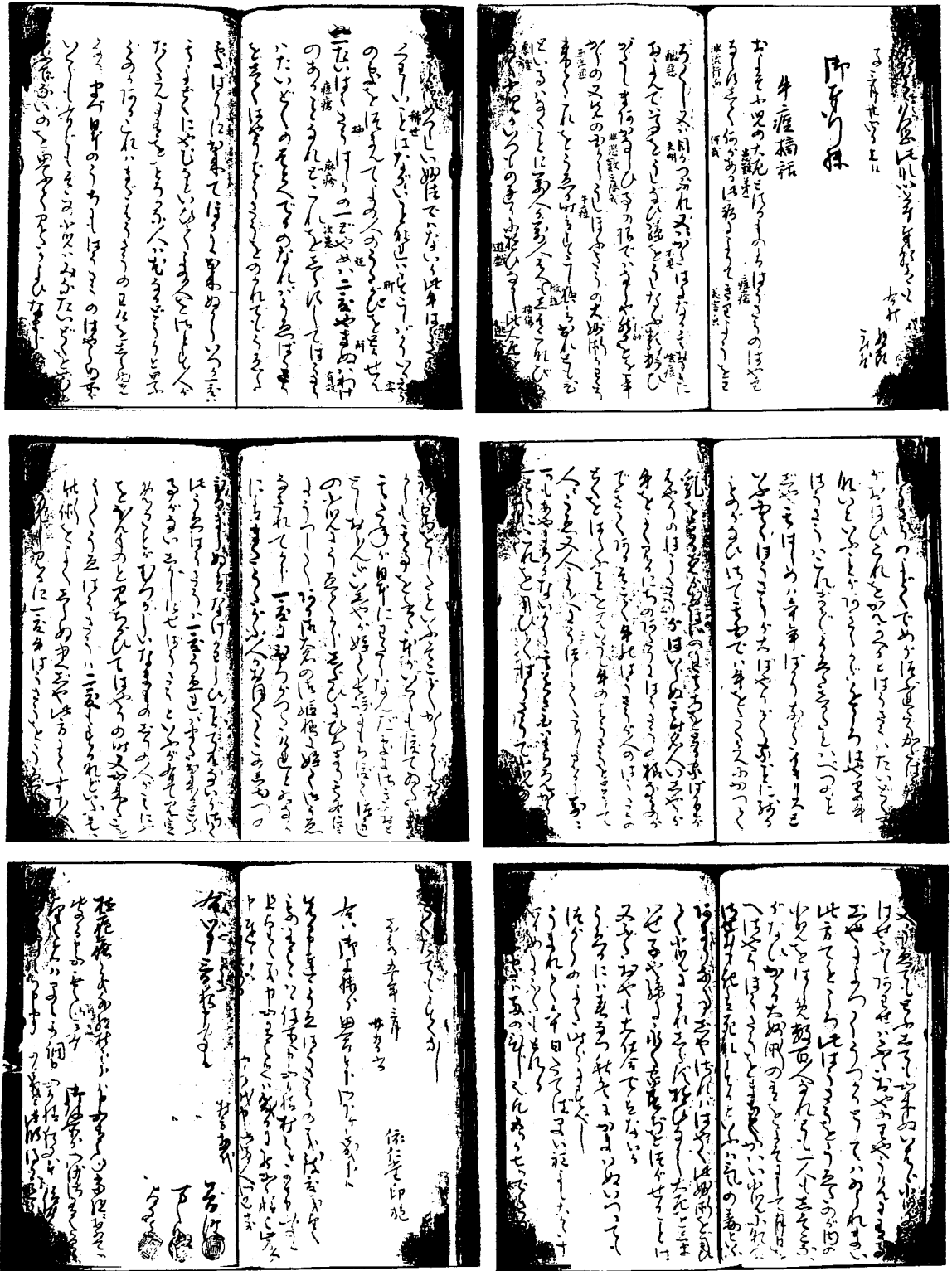
萬延元年（一八六〇）

○七月 幕府江戸ノ種痘館ヲ官ニ収メテ種痘所ト改稱シ、官許ヲ以テ種痘ヲ行ハシム

(一)

牛痘摘話

凡そ小児の大厄とするものは、はうそうのはや里なら須志て何かある。此病によりてき里ようを王ろくし 又ハ目可つぶれ 又ハかたはになる 其おもきにおよんでは子をうしなひ 孫をうしなふ類



図二 嘉永五年 牛痘摘話 美濃紙半折六帖 (17.5×26cm)  
上段の右から下段の左へ進む



救ひがたし ま阿かなしひ事の限りでハなしや 然るを近年からの又先の国から うしほうさうの大妙術か王たり来てこけをうゑる時者 少し熱者出れとも飛とい事はなく ことに万人か万人老人も志そこ那びるなく 小児かいつもの通りに遊ひなし此大厄を志□□□まことにめつらしい妙法でハないか 此牛はうさうのく王しいことはながいこと那連ハ すこしばかりいつえうの處を津まんでよの人のうたがいをとかせん

一たいはうさうはしかのひとやめハ二度やまぬハわけのあることなれど これを志ら須してはうさうハたいどくのそとへでるのなれば ばうゑばうさうを志てはやりばうさうをの可れても うゑた處ばかりに出来てほかに出来ぬから いつか一度ハそのよどくにやむるといひて よの人を御とす人かたくさんに有を をろかな人ハ尤なるどりと思ふ毛のか阿る これハまだはうさうの王介を志らぬ者なり まづ日本のうちにもほうさうのはやらぬ所がいくらも有どもその小児ハみなたいどくをやむといふでないのを思ふて見たらよい なまじひはや□ばうさうのよどくでめが津ぶ連て加たは二な□□□がおほひ これをかながへるとはうさうハたいどくで那いといふことが阿きらかだ 近ころはや里の牛はうさうハこれまでうゑた志かたとハべつもの者じや はしめハ六十年ばかり前からイキリスといふ国てはうさうが大ばやりで 家ごとに残る毛のがなひ 佐て某国てハ牛をたくさんにかつて乳をとる者がおほいのに 其ちをとる家ばかりがはやりばうさうがはいらぬ 其時名人い志やら牛をよく見るに ちの阿たりにはうさうの様な毛ができて阿る そこで牛能はうさうが人のほうさうのとくをはらふことを見いだし牛のほうさ

うをとりて人にうゑ 又人より人にう津してためし見るに別二一つもあやまちがないから 某近き国ハもちろんからも一とうにこれを用いて はうさうで小児の志ぬ祓だちをしたといふ そこでからからもおらんだからも其事を書た本がいくつも渡りてきたが まだ其た年が日本に王たつてなんだ處に 佐きのおとしおらんだい志やが始て長崎にも王渡り津うじの小児にうゑてから 志だひにひろまり其冬江戸にうつして阿る御大名の御姫様に始て御うゑなされてから一度に飛ろがった介連と るなかに者またうたがふ人がおほくてこの志まつの飛ろまらぬ者なけか王しひことではないか 佐て此うゑはうさうハ一度うゑ連バまた出来るといふ事がない しかしにせばうさうといふが有て見定めることがむづかしい なまもの志りの人が其にせを本ものと見ちがいて はやりの時又た出来たをとてうゑはうさうハ二度もする那連どいふ 是ハ此術をよく志らぬゆへじや 此方にてす十人た免し見るに 牛はうさうをうゑて□□□又うゑてもとふしても出来ぬ いはば小児の志□□□はせふし阿王せハふたおやの里やう介んに有事 ぢやによつてうっかりとしてハゑられまい 此方て近ころ此はうさうをうゑたのが 内の小児をはし免数百人なれとも 一人も志そこないがなひ かかる大妙術の有をよそにして 月日をへはやりはうさうわまちて かハい小児に那んぎ佐せおも起王死那するといふハ気の毒といふに 阿まりな事ぢや佐れバはやく此妙術を用ひて小児に王れ志ら須遊ひなし大厄を志まハ世子や孫に永く家筋を津がせることは又ふたおやも大仕合で王ないか うゑるにハ春夏秋冬かまハぬ いつ二ても津がうのよき時分にすべし

うまれて六十日たてば早い程よし大かた十四日めにふたもとれる  
うゑ處ハ両の飛じ也 凡五ツか七ツできるな□とくだてもすくなし

嘉永五年三月廿九日書

依仁堂印施

右は御上様より畏被下御下ヶ被成下候

先日申達候うゑはうさうの義 致度義届之毛の有之候ハハ役所へ  
申出候様 村々江可御申聞候 且届之義申出有候へハ幾日に罷出候  
様与此方へ申達候 以上 御手代中御両人御名前

三月廿五日

右四月三日夜 申聞候

村方惣代

善治

万之助

与五郎

植疱瘡之義外組村之義ハ申出有之趣 当組ニおゐてハ決而申出無  
之趣ニ付 御役所より御無沙汰有之候間届之者ハ早々取調申出候様  
猶又被 仰付候ニ付 村々早々御申聞可被成候 此段得意之□□

(二)

凡そ小児の大厄は疱瘡の流行でなくて何であらう。この病で器量  
を悪くし、目が潰れ、片端になり、重い時は子を、孫を亡くし、救  
つてやれないのは何と悲しい事ではないか。

近年、中国の又その先の国から牛疱瘡の大妙術が渡つて来て、牛  
疱瘡を植えると少しは熱が出るが、酷いことはない。この術を万人

に施しても、失敗することはなく、小児はいつものように元気に遊  
び、この大厄を免がれることが出来る。誠に珍らしい妙法ではない  
か。この牛疱瘡の詳しい説明は長くなるので省き、少しばかり必要  
なところを、かい摘んで述べ、この妙術に対する人々の疑問を解  
こうと思う。一体、疱瘡や麻疹(はしか)は一度病めば、二度は  
罹らない。この事を知らないで「疱瘡は体毒が外に逃がれるため  
に罹るのだから、たとえ植え疱瘡をしても、植えた所のみ疱瘡が出  
来、他の場所には出来ないから、いつかは、その毒で疱瘡を病むこ  
とになる」と言つて、世人を惑わすものが沢山いる。愚かな人はこ  
れを尤な道理と思つてしまふ。これはまだ疱瘡の原理を知らないか  
らである。日本国内に疱瘡の流行らない地域が幾らもあるが、そこ  
の小児が皆、体毒を病んでいないことを考へてみたらよからう。生  
嚙りの者は流行り疱瘡の余毒で目が潰れて片端になる事が多い。こ  
の事を考へると、疱瘡は体毒でない事は明かだ。近頃、流行の牛疱  
瘡はこれまでの植え疱瘡とは別のもので、初め六十年ばかり前にイ  
ギリスという国で疱瘡が大流行し、家毎に生き残つた者が無い程だ  
つた。この国では沢山の牛を飼つて乳をとる人が多いのだが、その  
乳を搾る家には、流行の疱瘡が入らなかつた。その時、名人の  
医者達が飼ひ牛を良く調べてみると、乳の辺りに疱瘡の様なもの  
が出来ていて、この牛疱瘡が人の疱瘡の毒を払う事を発見したのであ  
る。牛の疱瘡を取つて人に植え、またそれを人から人へ移して試し  
てみたところ、一つの過ちも無かつたから、イギリスに近い国は勿  
論、中国も一番にこの方法を攝り入れ、疱瘡による小児の死亡を根  
絶したと云う事だ。中国からもオランダからも、この妙法に就いて

書いた本が幾つも日本に渡って来ているのだが、肝心の牛痘の種は伝来されていなかった。所が先一昨年、オランダの医者が初めて長崎に渡って来て、通訳の子に牛痘を植えてから次第に広まり、その冬、江戸に種を移して、或るお大名のお姫様に初めてお植えしてから、一度にこの妙法が広まった。しかし、田舎にはまだまだ植え痘を疑う人達が多く、広まらないのは誠に嘆かわしい事ではないか。さてこの植え痘瘡は一度植えれば、痘瘡にまた罹ることはない。だが、偽痘瘡と云うのがあって真の痘瘡との見分けが難かしい。生嚙りの医者が、その真偽を見誤まって、二度も植えることがあるが、これはこの妙術を良く理解していないからだ。この方法で数人試してみたら、牛痘瘡を植えた後にまた植えても、痘瘡は出来なかつた。だから小児の幸、不幸は両親の了見によつていて、うっかりしてはいられない。こちらでは近頃、この植え痘瘡を小児をはじめ数百人の人に植えたが、只の一人も失敗はなかつた。こんな大妙術があり、伝来から月日がたつているのに、流行の痘瘡で小児を難儀させ、重いときには死なせてしまうのは、余りにも可哀相な事だ。だからこの妙術を用いて、小児が大厄に罹らず、元気に遊び、子や孫に永く家筋を継がせることは、また、両親も大いに仕合わせではないか。

植えるには春夏秋冬、いつでも都合のつくときでよい。

生まれてから六十日たてば、早い程良い。たいてい十四日目にカサブタがとれる。

植える所は両肘で、凡そ五ツか七ツ出来れば、とくだても無い。

嘉永五年三月廿九日

依仁堂印施

〔注および説明〕

初めてわが国での種痘が行われた嘉永二年から、この触書が上田藩から出された同五年まで、三年近くの日時が経過している。これはヨーロッパでの牛痘法の普及・伝達の数度に比べると、大そう遅い。漢方医療との関係なのであろうか。

この資料に関しては、特別に注を加えることはないが、前に揚げた年表の中にこの摘話に関連のある記事があるので、参照されたい。

(一) ジェンナーのこと

(二) 嘉永二年七月十七日 モーニッケが種痘を行った。

(三) 佐賀藩主鍋島閑叟のこと

#### 文献

一、中野操（昭和十三年）「牛痘日本移入考」『日本医事新報』

（上）第八一六号 一五九—一五二頁

（中）第八一七号 一五九—一六〇頁

（下）第八一八号 一六八—一六九頁

二、林四郎（昭和五十三年）「手術その歴史と展開」『NHKブックス二二〇』

三、山崎佐（昭和十九年）「お玉ヶ池種痘所」『日本医学史雑誌』

（其一）第一三二九号 一五九—一六六頁

（其二）第一三三〇号 一八六—一九五頁

（其三）第一三三一号 二〇三—二〇九頁

（其四）第一三三二号 二三四—二四一頁

（其五）第一三三三号 二五六—二六四頁